日本の子ども・世界の子ども

——国際児童調査より——

財団法人　日本青少年研究所
事務局長　田　中　　正

調査の目的

児童の生活実態、たとえば家庭生活、学校生活、遊びや労働の実情、健康や環境、等々が日本に限らず広く世界的に関心を呼んでいる。社会の関心を呼ぶ背景には、問題が山積みしているという実態があろうが、児童に関していえば、その問題は十分には把握されていないようである。また、十分に把握しようとしても、これは文字通り児童自身の問題であるから、児童の目を通してみた実態把握や意見聴取も、かなり必要とされる。

そこで日本青少年研究所では、昨年の国際児童年にちなんで、日本をはじめとしてアメリカ、イギリス、イラン、フィリピン、シンガポールにおける児童の生活実態や価値観に関する調査を、同じ項目、同じ方法で実施した。そして、わが国の児童のおかれている情況を国際比較の中でとらえようとした。

調査の方法

この調査は、質問紙による自記式回答法をとり、学校単位に実施したので集合調査法を採用した。ただし、イギリスの場合は、調査期間に教職員組合のストライキが行なわれたため、質問紙による面接法、したがって他計式で実施した。

調査の対象

調査の対象として、日本のほか5ケ国を選定したが、日本、アメリカ、イギリスは先進国として、また児童の生活様式が比較的よく類似していることから選んでいる。イラン、フィリピン、シンガポールは中近東、東南アジアの中で調査の可能な国として選んだものである。これら6ケ国において、日本の学校制度にしたがい、小学校4年生から6年生までの男女約1,000人を対象とした。しかし、学年と学令が日本の場合ほど一致していない国もあり、日本については3年生から6年生までに幅を広げ年令差を多少とも一致するよう配慮した。

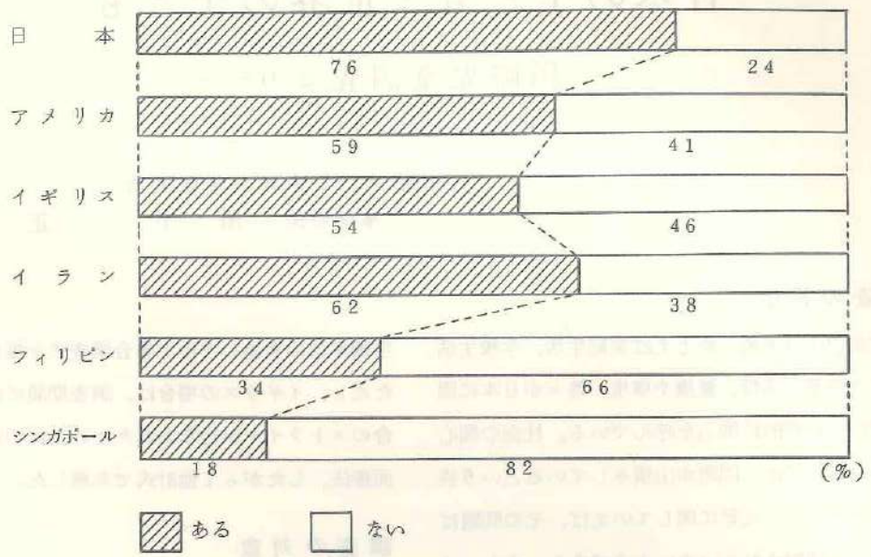
1.　子どもの生活実態

(1) 生活条件

〈子ども部屋〉

最近では子ども部屋が教育的観点から論じられ、その有効性が強調されて、わが国でも子ども部屋を与える家庭がふえている。欧米では早くから、いわゆる親子の生活空間の区分が進み、子どもは子どもの部屋で生活するといわれてきた。「あなたの家には、あなたの部屋が決められていますか」

1－1図　子ども部屋の有無



に対して、日本の子どもの４人に１人は「決められている」と答え、子ども部屋が日本でもかなり普及していることがわかる。ところが、この数字は６ヶ国中でもっとも高く、子ども部屋の占有率はアメリカ、イギリスを抜いている（1－1図）。

子ども部屋と一口に言っても、その広さ、機能、構造などからも違いがあり、同一には論じられない面も少なくはない。また子どもの年令によっても子ども部屋の意味は変わってくる。それにしても、この結果は、昨年わが国の住宅のことを「うさぎ小屋」とＥＣレポートで発表されたあとだけに、意外であった。

(2) 家族との関係

＜体罰経験＞

子どもが親の言うことを聞かないとき、わるさをしたとき、親はどうするか。わが国であれば、子どもの尻をたたいたり、少し頑固な親ならなぐったりする。そして良くも悪くも大きくなると、「小さい頃はよくぶたれたものだ」と回顧するであろう。子どものしつけ方にも、それぞれの国独特のやり方がある。したがって、どこの国でも子どもの尻をたたいているとは限らない。

「近ごろ（１ヶ月ぐらいの間に）、お父さんやお母さんに、たたかれたりなぐられたりしたことがありますか」との質問を試みた。ところが、イギリス、シンガポールでは、この質問は削除されたのである。その理由は、子どもを対象とする調査では、「教育上、不適当な質問である。ことに学校を通して行なう場合は、調査が拒否される」ということであった。これ自体、貴重な調査結果である。

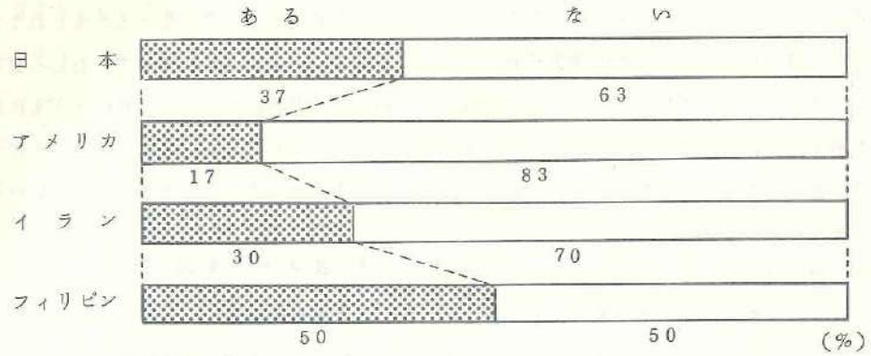
さて、４ヶ国の結果（1－2図）をみると、体罰経験が「ある」と答えたのは、多い順にフィリピン、日本、イラン、アメリカであった。日本の子どもは、３人に１人はこの１ヶ月の間に体罰をうけている。また、学年別、性別によって体罰経験の有無をみてゆくと、「ある」と回答したものは、どこの国でも低学年ほど多く、学年と共に減少している。ただし、日本だけは４年生から６年生までの間に差がない。子どもの年齢が増すにつれ、子どもに手がかからなくなっていくのは当然であるが、ただ日本の場合は、親が子どもから手を離すのが遅いようである。これは、親がいつまでも子どものことにかまいすぎるのか、それとも、日本の子どもは、他の国に比べてききわけがないのか、いろいろと解釈ができるようである。

性別でみると、体罰を受ける者は女の子より男の子に多く、４ヶ国に共通していた。男女差は、アメリカ、イラン、フィリピンでは１０％前後であるが、日本では２０％近くの差が開いている。つまり、日本はしつけの方法において、最も男女差が大きいのである。これは体罰が「言うことを聞かない」「悪いことをする」罰だと考えれば、男の子の方が女の子よりも親の手を焼いているということになろう。

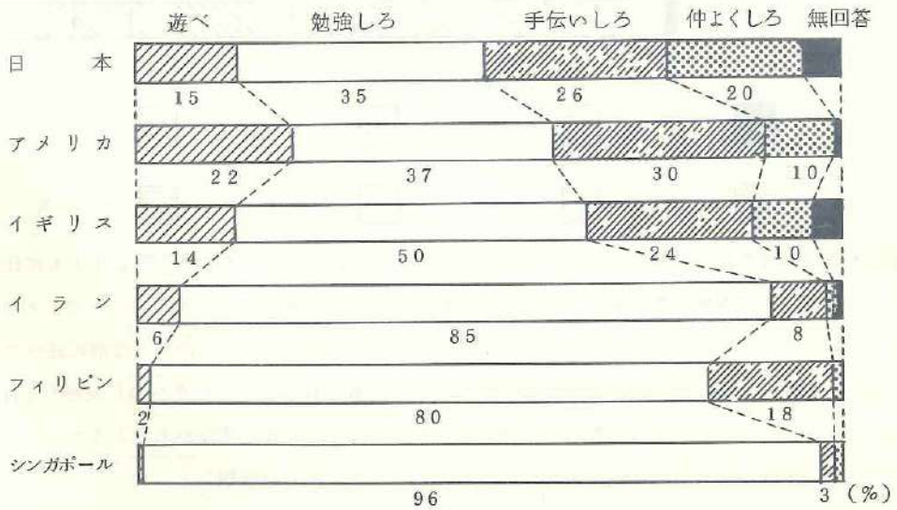
＜日頃、うるさく言われること＞

子どもが親から日頃注意される内容はどんなことが多いのだろうか。「お父さんやお母さんから、いつもどんなことを注意されていますか」の質問に対して、「子どもだから、毎日元気よく遊びなさい」「よい成績をとるように毎日たくさん勉強

1－2図　体罰経験の有無



1－3図　いつも注意されること



しなさい」「少しでもいいから毎日家のお手伝いをしなさい」「友だちといつも仲よくしなさい」の4つの回答を用意し、一つだけ選択させた。

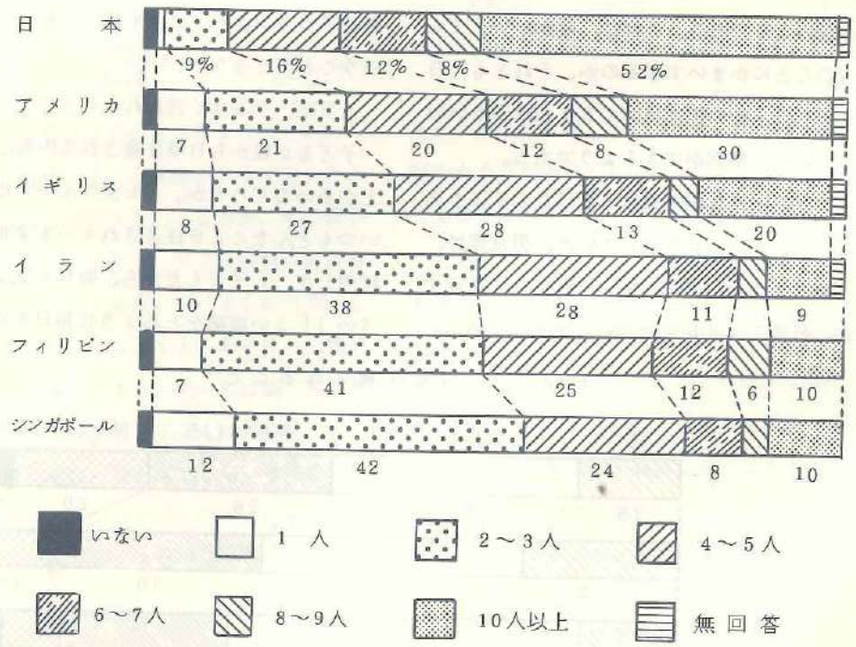
この結果、日本は（予想通り？）「よく勉強しろ」が最も多く、ついで「手伝いしろ」「仲よくしろ」「元気よく遊べ」の順であり、「勉強」に口やかましい親の姿が眼に浮かぶ。ところが、「勉強・勉強」とうるさく言っているのは、日本にだけ目立つ特徴ではないのである。1－3図にあるように、日本やアメリカ、イギリスはむしろ少ない方である。そしてイラン、フィリピン、シンガポールでは、親から「勉強しなさい」と追いまくられているように思えるかもしれない。が、ここではそのように判断せず、むしろ日本をはじめ、アメリカ、イギリスの親は子どもに対して、勉強をはじめとして、さまざまなことについて細かく注意を与えているとみた方がよいだろう。

(3) 友人との関係

＜友だちの数＞

一般に仲間集団は地域社会、学級、クラブなどを基盤にして、その中で形成されてゆく。遊びの

1－4図　友だちの人数



種類が多ければそれだけ友だち仲間も多くなるし、年令と共に友人の選択基準も変化してくると思われる。

まず、「仲のよい友だちはいますか」の問いに対して、ほとんどが「いる」と答えた。つぎに「仲のよい友達は何人くらいいますか」の問いに対しては、1－4図を見るとわかるように、一見して日本の子どもが他の国の子どもに比べて友だちをたくさん持っている。ついでアメリカ・イギリスの順である。このことは前に述べた「日ごろ注意されること」のなかの「友だちと仲よくしなさい」の回答と関係があるようだ。

＜友だちの種類＞

友だちの数が多くなれば、その種類もさまざまになり、いろいろな友だちがでてこよう。そこで仲の良い友だちとはどんな人かをたずね、「同じクラスの友だち」「前に同じクラスだった友だち」「同じクラブの友だち」「家の近くの友だち」「塾やおけいこごとで知りあった友だち」「その他」の中からあてはまるものを複数回答させた。その結果は1－1表である。その結果、この年令の子どもたちにとって、同じクラスであること、あるいは家が近いことが友だちをつくる最も大きな要因になっていた。日本ではことに、「同じクラス」や「前に同じクラス」の友人が、他の国に比べて多いことが目立つ。クラスが同じであることとは、同学年、同年令ということであり、最近の子どもたちは違う年令の子とは遊ばないとか、ガキ大将がいないとか言われていることを考え合わせると、それを裏付ける結果となった。また、「塾やおけいこの友人」も、他の国には少なく、日本独特なものといえそうである。

1－1表　仲の良い友人の種類

	日本	アメリカ	イギリス	イラン	フィリピン	シンガポール
同じクラスの友人	91.8	78.3	89.7	86.4	82.2	82.9
前に同じクラスの友人	59.9	54.1	19.8	46.4	20.5	29.2
同じクラブの友人	31.9	25.0	6.4	7.1	15.7	8.0
家の近くの友人	53.3	65.2	50.5	47.7	57.9	39.5
塾やおけいこの友人	21.4	17.8	10.5	5.6	9.3	6.4
その他の友人	30.8	57.0	7.5	23.9	0.7	9.8

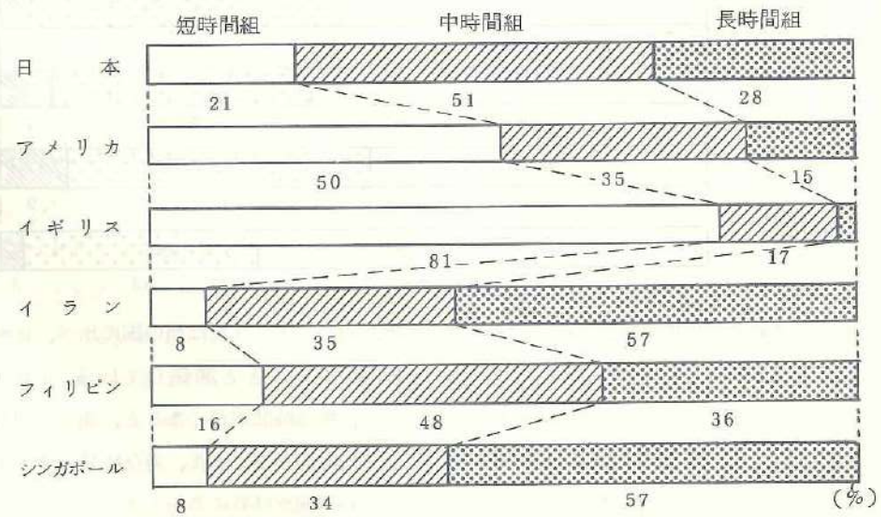
(4) 生活時間

＜勉強時間＞

子どもたちは一日のうち、家では何時間位勉強しているのだろうか。

家での勉強時間を問い、その結果、「やらない」を含め1時間ぐらいまでを「短時間組」、2時間

1－5図　家での勉強時間



ぐらいまでを「中時間組」、それ以上を「長時間組」としてまとめ、1－5図に示した。

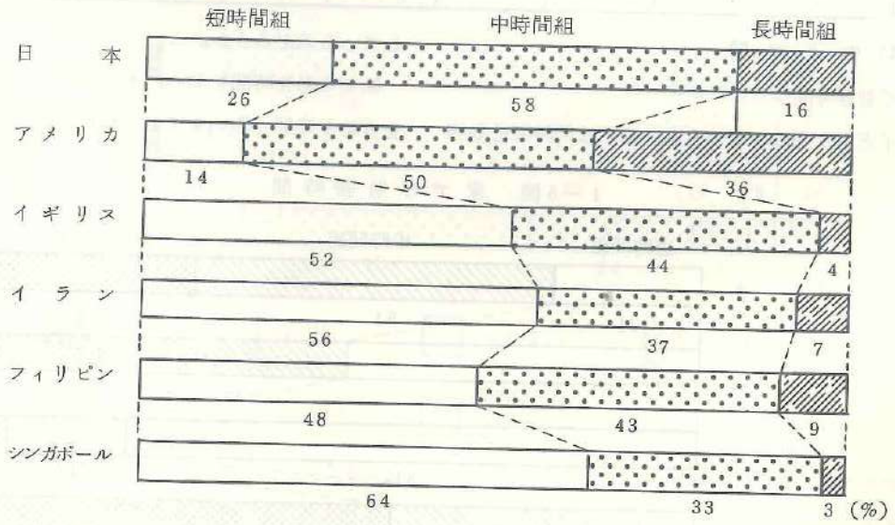
これを見ると、日本の子どもの勉強量は、他の国に比べて多くも少なくもない。もっとも塾で勉強して、家では勉強をしていないのかもしれないが、さかんに「学歴社会」とか「入試地獄」と言われている割には、家での勉強時間は少ないようである。

ここで目立つのは、アメリカ、イギリスの短時間組と、イラン、フィリピン、シンガポールの中時間組、長時間組である。イラン、フィリピン、シンガポールといった発展途上国は、先進国に比べて、総じて勉強時間が長い。また、親からの注意にしても、途上国は「勉強しなさい」がほとんどを占めていた。また、ここでは触れていないが、クラスの人気者の条件の第一に、日本やイギリスでは「面白い話をする人」（アメリカでは「だれとでも仲よくする人」）があげられていたのに対し、イラン、フィリピン、シンガポールでは、そろって「勉強がよくできる人」があげられていたし、勉強が価値の基準にさえなっている感があった。これから発展しようとする国では、進んだ知識や技術を吸収・習得するために、国民全体が学習や勉強に熱を入れている。そのために、勉強時間も必然的に長くなってくるのだろう。また、必ずしも勉強時間の長さイコール入試地獄とは言えないようである。

＜遊び時間＞

遊び時間についても、「遊ばない」を含め1時間ぐらいまでを「短時間組」、3時間ぐらいまでを「中時間組」、それ以上を「長時間組」とまとめた（1－6図）。

1－6図　遊び時間



6ケ国の中で最も遊び時間が長いのはアメリカで、次に日本であった。逆に短いのは、シンガポール、イラン、イギリス、フィリピンである。イギリスについては、勉強時間も遊び時間も短いのであるが、これは調査実施時期が一月であったため、イギリスでは他の国に比べ、日照時間が極端に短いことと関係している。イギリスを除けば、勉強時間が長くなると、遊び時間は短くなる傾向がある。また、遊び時間の学年差を見ると、わが国だけ特に差が大きく、6年生で3時間

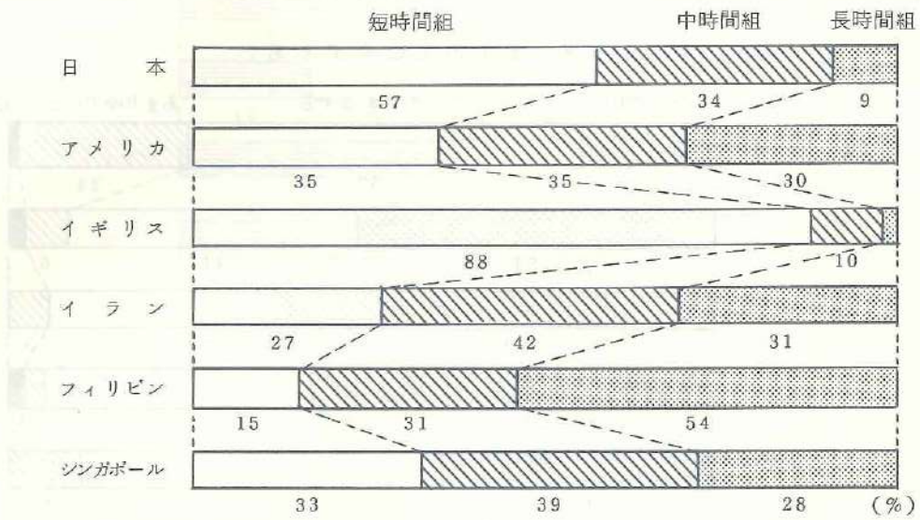
以上も遊んでいるこどもは20人に1人になり、半数近くが1時間以下になっていた。この理由は、今さら述べるまでもないだろう。

＜手伝いの時間＞

「家の手伝いや仕事をする時間」についてはどうだろう。やはり、手伝いの時間も「やらない」を含め30分以内を「短時間組」、2時間以内を「中時間組」それ以上を「長時間組」と分けよう（1－7図）。

手伝い時間の短い国は、イギリスの次が日本である。「長時間組」はフィリピン、イランに多く、フィリピンでは5人に1人、イランでは3人に1人以上の者が、毎日家で2時間以上も働いていることになる。つまり、勉強も手伝いもしっかりやっているのである。

1－7図　手伝いの時間



学年別にみると、日本では学年が上がるにつれて「手伝いや仕事」の時間が減少している。これは「勉強が忙しい」ためであるかどうかは速断できない。

先に述べた「よく注意されること」では、「勉強しろ」とともに、「手伝いをしろ」も学年とともに増加している。男の子に対してと女の子に対してとでは、多少の差はあるだろうが、なんと日本の子どもは忙しいのだろう。「家庭勉強はしなければならない。塾にもおけいこごとにも行かなければならない。お手伝いもしなければならない。自分の好きなテレビも見たいし、マンガも読みたい……」である。手伝いの内容は不明だが、約半数が30分以内であることから、食事の後片付けや靴みがき、花の水やり程度のことであろう。親が「少しでもいいから手伝いをしなさい」と注意しているのに対し、子どももそれにこたえているわけである。

2. 子どもの価値観

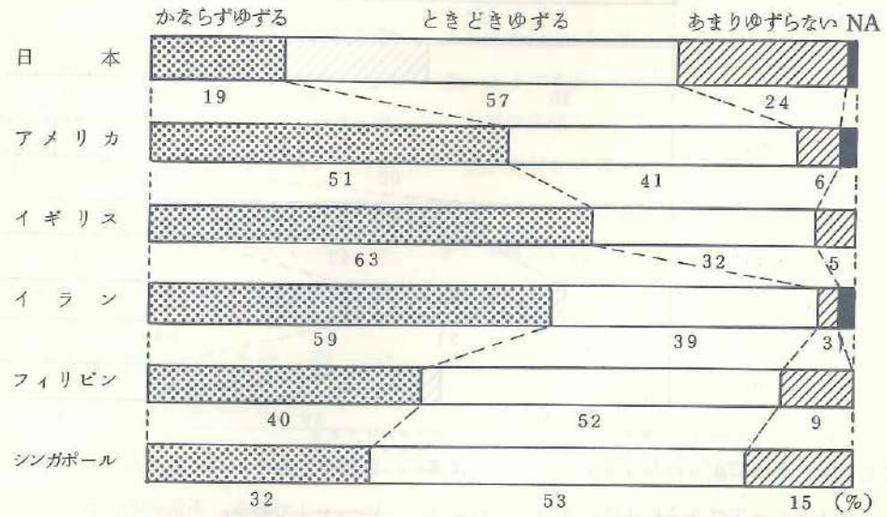
(1) 子どもの価値観

＜電車内でのゆずりあい＞

「電車やバスに乗ったとき、お年よりや体の不自由な人がいたら、あなたは席をゆずりますか」という質問をした。これに対して「かならずゆずる」の率は、日本が一番最低であった。最高はイギリスで5人のうち3人が、「かならずゆずる」と答え、次いでイラン、アメリカ、フィリピン、シンガポールとなっている（2−1図）。

また、日本の場合、おもしろいことに「かならずゆずる」の男女の比率が学年が増すにつれて逆転していた。3年生では女子に多かったのが、6年生になると、男子に多くなるのである。子どもが成長することにより、彼らの社会に対する態度が変化するのは当然であるが、その変化に男女の差異が現われるとすれば、そこには日本文化が持つ独特の環境要因が働いていると考えられよう。

2−1図　電車内でのゆずりあい

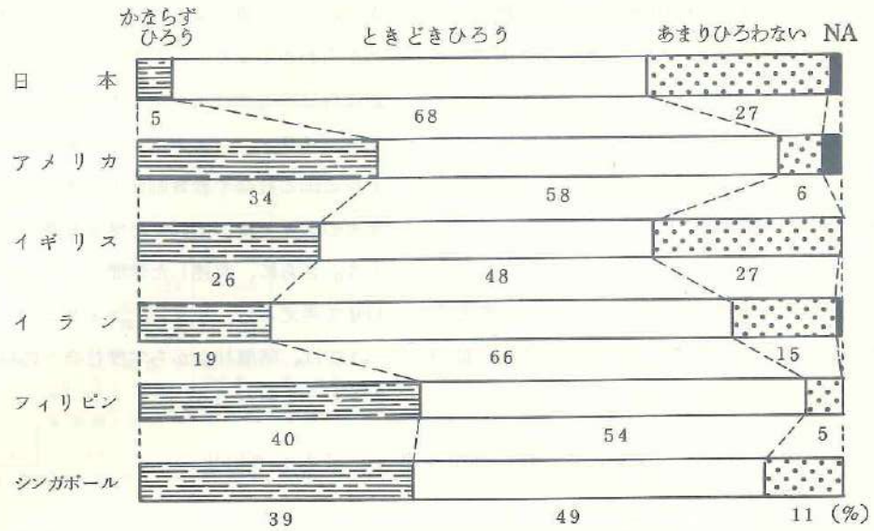


＜ゴミを拾うか＞

「学校の廊下や校庭にゴミが落ちていたら、あなたはそれをひろいますか」という質問をした。2−2図からわかるように、日本は「かならずひろう」の率が、他の国に比べて極端に低い。

学校の廊下や校庭は、いうまでもなく子どもたちみんなが利用する場であり、施設である。この質問では、個人と社会との関係を子どもがどのように考えているかを知ろうとしているのであるが、現実問題として、ゴミがあまり落ちていなければ「あまりひろったことはない」の可能性は高くなる。しかし、この点を考慮して前述の「電車内で席をゆずる」の低い率をも考え合わせると、日本の子どもの低い公共意識やエゴイスティックな一面がうかがわれる。

2−2図　落ちているゴミを拾うか



3. 子どもの社会観

＜学歴は大切か＞

「いい学校や大学を出た人だけが偉くなれるのは当り前だと思う」かどうか質問した。

いい学校や大学とは、まさに学歴社会での有名校や、俗にいう一流大学のことである。この質問によって、今や日本の社会問題となっている受験問題に対して、その真只中にいる子どもたちの考え方が把握できよう。

結果は3−1表に示すとおりである。日本の子どもは「そう思う」率が最も低く、アメリカも似たような傾向である。一方、イランでは「そう思う」の回答は69.5％あり、ある特定の学校の地位が、日本やアメリカよりも強固に確立しているようである。そしてシンガポール43.3％、イギリス30.7％、フィリピン27.8％の数値も、イラン同様の文脈で理解することが可能である。

もっとも、これを学年別にみると、表が示すように、高学年になるほど「思わない」子どもが増

3−1表　いい学校を出た人だけが偉くなるのは当り前だと思う割合

国名＼学年	3年	4年	5年	6年	全体
日本	13.2％	8.9％	7.5％	8.3％	8.7％
アメリカ		20.8	11.6	7.1	13.6
イギリス		38.9	30.7	21.3	30.7
イラン		80.0	67.2	60.3	69.5
フィリピン		38.9	22.5	22.2	27.8
シンガポール		75.1	41.8	19.8	43.3

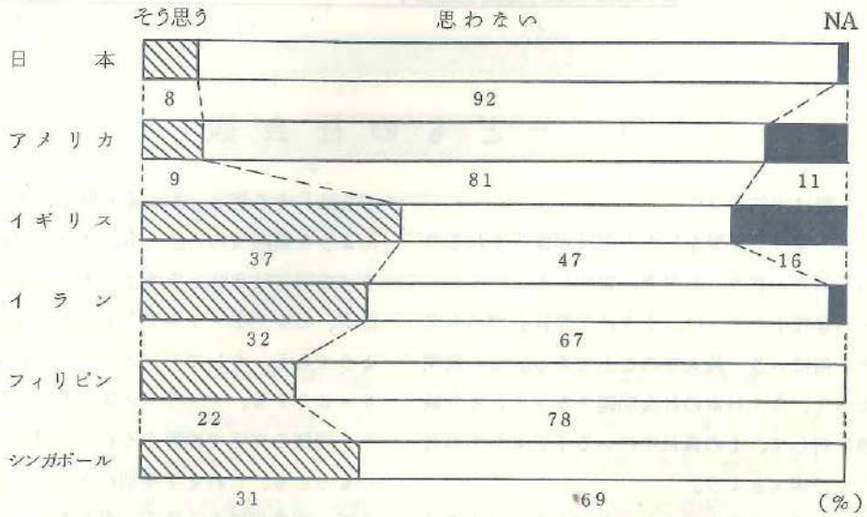
えている。日本はそれほど明確ではないが、シンガポールは７５.１％→１９.８％、イランは８０.０％→６０.３％と急減している。他の３ヶ国でも絶対数が低いにもかかわらず２０％も減少する点が注目される。学校教育を受けるほど、学校がすべてではないと考えるようになるのは、まさに世界共通の現象なのだろうか。

＜出　世　観＞

親の地位や身分によって、子どもの出世が左右されるかどうか、つまり、自分の国が実力本位の社会かどうか質問した。

「お父さんの地位や身分が低い人は、どんなにがんばっても偉くなれないと思う」者は、３－１図からわかるように、日本やアメリカでは少ない。逆に自分の力では出世できないと思う者は、イギリス、イラン、シンガポールに多い。これはそれぞれの国の社会や教育制度と大きく関係がある。後者の国々では、それだけ階層意識が強いといえよう。さらに、前述した学歴に対する価値観と合わせて考えると、イラン、フィリピン、シンガポールでは、階層社会から学歴社会への移行期にあるとみてよいだろう。

３－１図　親の地位や身分と子どもの出世



さて、日本の結果を学年別でみると、出世観は学年とともに変化しており、学年がすすむにつれて、〝本人の実力次第〟と思う者が多いという結果であった。子どもたちは、学校の成績が良ければいい学校に入れることを知っている。しかし、いい学校が出世を約束するかは、前述の学歴観の結果と照合すると、興味深い対比をみせている。

結論のみを示すなら、小学生段階の子どもたちにとっての出世とは、いい学校に入ることなのであろう。そしていい学校を卒業することが、大人の社会での出世に結びつくかどうかは、まだそれほど現実性をもって考えることができないと言えよう。

4.　つきたい職業

４－１表　つきたい職業（上位10）

	日本		アメリカ		イギリス		イラン		フィリピン		シンガポール	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子
1	スポーツ選手 122	教師 92	スポーツ選手 124	教師 108	スポーツ選手 132	看護婦 87	医師 164	医師 143	技術者 132	医師 157	医師 65	教師 128
2	運転手 74	保母 91	保安・警備の仕事 54	看護婦 73	軍人 68	教師 72	技術者 137	教師 134	医師 116	教師 46	軍人 65	看護婦 59
3	医師 54	おけいことの先生 57	運転手 51	動物関連の仕事 66	保安・警備の仕事 56	動物関連の仕事 51	パイロット 59	看護婦 22	軍人 57	秘書 43	保安・警備の仕事 64	医師 42
4	パイロット 44	看護婦 44	芸術家 43	芸術家 62	技術者 51	美容師 46	軍人 35	家政婦 14	パイロット 56	経理の仕事 39	教師 46	宗教関連の仕事 30
5	技術者 33	芸術家 37	医師 36	医師 28	運転手 30	エア・ホステス 40	科学者 30	科学者 12	経営者 28	サービスの仕事 28	技術者 41	保安・警備の仕事 11
6	科学者 32	歌手 31	技術者 36	スポーツ選手 24	経営者 25	芸術家 39	教師 19	エアラインホステス 12	法律家 14	経営者 11	ビジネスの仕事 19	技術者 5
7	教師 28	美容師 23	科学者 28	秘書 22	教師 17	秘書 36	スポーツ選手 11	作家 10	保安・警備の仕事 14	保安・警備の仕事 10	科学者 14	ビジネスの仕事 4
8	公務員 22	スポーツ選手 21	建築家 26	ファッションモデル 18	パイロット 17	スポーツ選手 15	保安・警備の仕事 5	パイロット 6	科学者 13	技術者 9	宗教関連の仕事 5	科学者 2
9	漫画家 21	スチワーデス 17	パイロット 23	科学者 16	芸術家 14	保安・警備の仕事 14	運転手 4	技師 4	宗教者 10	法律家 9		
10	経営者 21	デザイナー 16	動物関連の仕事 22	美容師 14	科学者 13	作家 10	作家 2	秘書 2	芸術家 4	芸術家 7		
数値	1,023人	947人	674	709	503	492	574	426	500	500	359	315

子どもの価値観を知る上で非常に有効とみられるものが職業観である。子どもたちに「大人になったらどんな職業（仕事）につきたいか」を自由記述式で回答させた。その結果が４－１表である。

これを見ると、２つのグループに分けることができよう。一つは日本、アメリカ、イギリスで、もう一つは、イラン、フィリピン、シンガポールである。つまり、先進国と発展途上国とに分けられる。そして、先進国ほど、男女の差が明白である。発展途上国では、性による役割分割以前の問題として、国民すべてが国家社会発展のために、一致協力している姿をみることができよう。

おわりに

世界は、めまぐるしく移り変わっている。その中で、子どもをとりまく情勢も変化し、さまざまな問題が山積されている。これらの問題は、子どもによってでなく、大人社会が作りだす問題である。これらの問題解決にあたって、大人の頭だけで策を考える前に、子どもの目を通してみた実態把握や意見聴取によって、大人の観点に欠けている部分を補足しなければならない。その意味においても、この国際比較は、何らかの資料が提供できたと思う。